ふうど

想い｜つくる｜伝える

［Fuud］
2024
春号
季刊

2024 Eye's
新潟ここだけ物語

安田瓦を知る

Take Free
ご自由にお持ちください

にいがた瓦館「かわらティエ」のエントランスホールを飾る安田瓦のオブジェ。平瓦、軒先瓦、のし瓦など役割のことなる瓦と煉瓦を組み合わせ、実用で鍛えられた建材にこもる用の美と天然素材ならではの温もりを伝えている。

がんばろう●ニッポン!

わたべ
カメラマンの
ふうど
取材メモ 13

今回の取材テーマ
地球に愛された町

やすだ瓦ロードの南端に位置する「庵地焼 旗野窯（あんちやき はたのがま）」。1878年創業の窯元で、4代目の旗野麗子さん、聖子さん、佳子さんが製作にあたる「三姉妹の窯」として知られる。地元の土で焼かれた陶器は、面取りをした多角形の形状や、漆黒に発色する釉薬が特徴で、「新潟県伝統工芸品」にも指定されている。今回、やすだ瓦ロード撮影の最後に寄ってみることにした。

初めて取材で訪ねてから、30年近くの月日が流れていた。工房の佇まいは当時のままだった。3人も変わらず元気で、懐かしさが込みあげてきた。「ウチは全く変わらず、昔のままやっていますわ」と麗子さんが佳子さんと顔を見合わせながら笑う。工房も、作品も、人も、変わっていないことの心地よさと安心をしみじみと感じた。

後日、撮影のために再訪した。製作シーンの写真はもちろんだが、先日もう一つ、被写体の準備をお願いしていた。それは粘土に野菜を漬ける、郷土料理「泥漬け」だ。今回、丸三安田瓦工業の遠藤和人さんから教えてもらい、どんな漬物なのか大いに興味があった。

土と塩を混ぜ、ナスを漬けるのがこの地域の定番。ここの粘土は鉄分が多いので、ナスの色が鮮やかに出るという。「ちょっと塩加減が強かったみたいだけど、食べてみて」と勧められ、一口。泥に漬かっていたのに、泥臭さは全くなく、ナスの皮の食感がシャキッとしていて美味しい。土に食べ物を漬けるという発想が、なんだか感動的だった。これ以外にも、昔の女性は粘土で髪を洗うこともあり、黒々としたつやのある仕上がりになったそうだ。安田の土、おそるべし。様々な土の恩恵に加えて、この地域は良質の花崗岩「草水石」の産地でもある。安田は「地球に愛された町」なのだと思った。

写真、文章／スタジオF(t)　渡部 佳則

①庵地焼とナスの泥漬け。ナスの紫色が鮮やか。
②粘土から取り出したナス。
③工房で製作する佳子さん。足で回す「蹴りろくろ」を使い続ける。

編集後記

今号も「灯台もと暗し」でした。こんなに優れた瓦が新潟市から車で30分ほどの近場で生産されていて、しかも日本で最北端の産地だったとは。取材当初は、なぜ保田地区に瓦に適した粘土が豊富なのか、と土壌的なことばかりに注目し、取材の折も的外れな質問ばかりしていました。でも原稿を書き上げて気づきました。安田瓦が現在の地位を築いている背景に技術的にたゆまぬ努力があったことは本文に紹介したとおりですが、もっと突き詰めてみるとその根底に安田固有の風土とそれによる気風があるのではという思いに至りました。安田は一年中台風なみの強風が吹く県内でも特異な地区。強い風とともに暮らす毎日は、否が応でも時代や環境に立ち向かう勤い精神性を養うのでしょう。その前向きな心が伝統と未来の架け橋になっていることを現地で感じ、リスペクトされることの多い日々を送ることができました。（渋川）

ふうど 2024春号 vol.64

企画編集　ふうど編集室
発行人　高橋　佑
取材編集　渋川綾子
　　佐々木聰
写真　渡部佳則
デザイン　斎藤遵司
題字　小林　翠

発行所

株式会社タカヨシ　ふうど編集室

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS　私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

■本社・工場／〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21　TEL（025）381-2000 FAX（025）381-4800
■東京支社／〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階　TEL（03）3837-4488 FAX（03）3837-4884
■上越営業所／〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階-2　TEL（025）381-2000 FAX（025）520-7049
■仙台営業所／〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオウラビル501号室　TEL（022）266-1711 FAX（022）266-1712
■名古屋営業所／〒464-0025 愛知県名古屋市千種区桜が丘295番地 第8オオタビル7階　TEL（052）753-8080 FAX（052）753-8081
■オフィシャルサイト／https://www.takayoshi.co.jp

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工房、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館　<東区>新潟空港、桑名病院、パティスリーカフェオルレアン　<西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘　<南区>新潟市農業活性化研究センター　<北区>新潟せんべい王国、ビューー福島潟、潟川公民館<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館<西蒲区>カープドッチ、ドメーヌ・ショオ　<秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館
【新発田市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立図書館、豊浦地区公民館　【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん　【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会
【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこし復興交流館おらたる　【燕　市】分水ビジターサービスセンター
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里　【十日町市】十日町市観光協会、十日町市博物館　【南魚沼市】樺苑
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市立水族博物館うみがたり、上越市立高田図書館、上越市役所、上越あるるん村
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館
【東京都】<中央区>ブリッジにいがた　<千代田区>新潟市東京事務所

本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレスバインダー　針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

RICE INK　この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

沈黙の番人

和風建築のシンボルである屋根瓦。
いつも見ているのに、気にかけることは殆どない。
しかし新潟には雪国が鍛えた強くて美しい瓦がある。
阿賀野市で江戸時代から製造がつづく『安田瓦』だ。
全国の主要産地のなかで最北端に位置し、堅牢な瓦として評価が高い。
その伝統的な地場産業に、新しい風が吹いている。
どんな風なのだろう。現地で感じてみた。

想い　自然と対峙する

国の重要文化財を守る

瓦は自然界にある粘土を、堅く焼き締めて作る建築資材である。

古墳時代、大陸から仏教とともに瓦の製造技術が伝来し、いくつかの技術革新を経て、日本独自の瓦にアップデートしてきた。

そんな伝統的な瓦文化を継承する安田瓦の産地が、阿賀野市の保田地区にある。五頭連峰の麓に位置するこの地区は、少し高い場所にあり、瓦の渡り職人により良質な粘土が発見され、天保年間(一八三〇)から瓦や陶器の窯業が盛んだった。黒い面取り茶器で知られる庵地焼や、素朴な安田焼の窯も同じエリアに築かれている。

明治初頭、新しい国づくりが始まるや、耐火性のある堅牢な瓦葺き屋根が重要な建物に採用され、安田瓦は県内外に販路を広げていく。新潟市の旧新潟税関庁舎、新潟県議会旧議事堂、山形県酒田市の山居倉庫は、この時期に安田瓦が葺かれ、現在はいずれも国の文化財に指定され、大切に保存されている。さっそく旧税関庁舎に行ってみる。いつも見慣れている屋根の上には、百年以上の間、風雨と対峙し、与えられたミッションを黙々と遂行してきた安田瓦の姿があった。雨にまみれる瓦は、一枚一枚の色合いや光沢を微妙に変え美しかった。しばらくの間、じっと見上げていると、半裸の職人たちが筋肉を張らせて働く姿が浮かび上がってきた。これから、私たちが生を終えても、この建物は存在し続け時代の昂りを伝えていくと思うと、いまさらだが、屋根材として瓦が背負った重要な役割に気づく。

時代を記録する瓦

知っているようで全く知らない安田瓦について、ちゃんと学習すべきと思い、安田瓦協同組合を訪ねる。組合の事務所は、令和五年の夏に新設された体験型複合施設〈かわらティエ〉にあった。その施設は現代風のすっきりした外観をそなえ、ひと目で伝統的な瓦のイメージを一新しようとする意思が見てとれた。

太陽の光にあふれる館内で、広報担当の加茂豊和さんが、「瓦づくりは自然の土が相手なので奥が深く、私も分からないことが多いです」と前置きし、いろいろな物語を教えてくれる。「昔、全国的に城が多く作られた時代があり、各地の領内で瓦が焼かれました。城下町にある〈瓦町〉という町名は、かつて瓦を製造していた時の名残りです」。県内では安田瓦の他に、隣接する笹岡・山崎の瓦や、加茂・田上で産する黒い陣ケ峰瓦があり、瓦の需要が拡大した時代は、産地同士で協力しあい〈新潟瓦〉として出荷したという。現在の瓦産地は県下では安田だけである。

なぜ安田瓦だけが堅調なのか。

「長い間、失敗と試行錯誤を繰り返し、寒冷地仕様に特化した独自の技術を確立できたからです。その技術が確立した明治期は、瓦の生産量が増え、県内だけでなく東北各地に北前船の寄港地から販路が広まっていきました。その背景に重量のある瓦は重しになり、船の安定的な航行に最適な積荷だったという側面もありました」。

北海道では初期の網走監獄や旭川の軍事施設にも、安田瓦が使われていたそうだ。

鶴ヶ城の赤瓦

安田瓦の高い技術力を物語るエピソードがある。会津若松市の復元された鶴ヶ城の赤瓦は、安田で製造されたもの。その経緯について「昭和四十年代に復元した鶴ヶ城の屋根瓦は黒でした。しかし、その後の大改修工事で、現場から赤っぽい瓦が大量に出土したことから、江戸時代の城は赤瓦だったとされ、屋根を赤瓦葺きにすることになりました。しかし昔の瓦を焼いた会津本郷は、もう窯元がなくなっていました。そこで全国の数カ所の産地が試作品を提出し、審査の結果、安田で焼いた瓦が選ばれました。土の成分が当時の瓦に近かったことと、恐らく表面がザラつき昔風で無骨なテイストが評価されたのではと思います。約十万枚の瓦を納品しました」と加茂さんは説明する。そして平成二十三年(二〇一一)、赤瓦の復元工事が竣工した直後に東日本大震災が起きた。が、鶴ヶ城は何の被害もなかったそうだ。

続いて加茂さんは瓦の色について、興味深いことを話しだす。

「安田瓦の色は、渋い光沢があるシルバー系の〈鉄色〉です。新潟の人はそれが一般的な屋根の色のように思っています。でも実はマイナーな色なんです。鉄色の分布は福井県と、新潟県内のなかで柏崎以北から山形の県境までに限られています。石川・富山は黒い能登瓦、山形から秋田も黒い庄内瓦が一般的です。佐渡も黒い瓦ですね」。なぜ距離的に離れている福井と新潟だけ鉄色なのか？

「新潟の瓦の製造技術は、越前瓦の瓦職人がもたらしてますので、製法や様式がそっくりなんです」。そうか瓦の色の違いは、当時の先端技術の伝播ルートを示していたのか。

瓦から、いろんな歴史が見えてきた。では雪国が鍛えた安田瓦は、どんな瓦で、どのように作られるのだろう。いざッ工場へ。

100年以上、日本海側特有の厳しい天候から貴重な建物を守ってきた安田瓦が葺かれる、新潟県議会旧議事堂(上段右)と旧新潟税関庁舎(左)と二重屋根で庫内の湿気防止をはかった酒田市の山居倉庫(下段右)。左は家内工業的な瓦製造が最盛期だった往時を物語る阿賀野市保田のイギリス積みの煉瓦煙突。

雪国の名品ができるまで

つくる　土と炎と人

窯から出て間もない熱い瓦の寸法を確認したり、冷却後の瓦の反り具合など、梱包前に品質の最終チェックをする熟練工たち。

『役瓦』を作る工場棟では手馴れた職人が、伝統的な工法で特殊な形状の瓦をひとつひとつ手づくりする。

長さ80mのトンネル窯の脇で、釉薬が施された大量の生地が窯の余熱で乾燥されながら、窯で焼かれる順番を待つ。夏場、庫内の気温は50度をこえるという。

安田瓦が強い訳

強い瓦として定評がある安田瓦だが、どんな点が優れているのか。安田瓦協同組合理事長で、丸三安田瓦工業株式会社の代表を務める遠藤和人さんに解説してもらう。遠藤さんは代々続いてきた窯元の四代目である。

「粘土を原材料にしている瓦は、本来、水を吸収する性質があります。安田瓦は吸水率が約三パーセントで、水を吸いにくい瓦です。JIS規格の吸水率は十五パーセント以下ですので、基準を遥かに下回る数字です」。吸水率と瓦の強度は、どう関係するのか。「瓦の吸水性は凍害に直結し、瓦の強度を左右します。冬季の積雪で瓦の中に浸透した水分が、春の高温で融けだし瓦が割れやすくなるのです」。では水の浸透を抑えるために、どのようにするのか。

「ひとつは焼き方の工夫です。土をより焼き締める独特な焼き方をします。焼きの前半は酸化焼成、後半に還元焼成という酸素の供給を止め、土に含まれている酸素を燃焼エネルギーとして引き出す焼き方をします。これによりスカスカだった土が締まり、生地はプレス仕立てから十七パーセントほど収縮します。この還元焼成法が安田瓦の特徴で、他の産地は酸化焼成が一般的です」。ちなみに瓦を焼く窯は、長さ八十メートルのトンネル窯。炎の温度は二〇〇度から一二〇〇度。その中を瓦を載せた台車がゆっくり移動しながら二十七時間焼かれるという。

もうひとつの特徴は、一般的には外気に触れる面だけ釉薬を施すが、安田瓦は両面に自然の鉄分を多く含む酸化鉄の釉薬を施し、瓦をコーティングするようにしていること。また、この釉薬により、いぶし銀のように鈍く光る安田瓦独特の風合いの瓦になるという。また還元焼成により、酸素が出ていった痕ができ表面がざらざらになる。これも雪国ならではの仕様になる。屋根の雪下ろしをする時に、足元を滑りにくくさせる工夫なのだ。一枚の瓦に、これほど細かい気遣いがあることを全く知らなかった。

土を知り尽くす

遠藤さんは、瓦づくりの奥義ともいえるコアな技術を教えてくれる。「昔から伝わる瓦づくりの格言に、『一に土、二に焼き、三につくり』とあるように、土をつくる工程が重要なんです。確かに近くに良質な粘土がありますが、粘土といっても何でもいい訳ではありません。良い粘土とは、火に強い粘土です。それは硬くて粘り気があり、少し砂が混じるザラザラした状態のものです。しっかり見極めて採ったつもりでも、高温に耐えられるかどうかはテストピースを焼いてみないと分からないのです」。う～ん、自然の土を相手にする瓦づくりは、奥が深そうだ。

さらにディープなことも。

「粘土は掘った場所によって質が違います。乾燥した時や焼いた時に収縮率が異なるため、三種類くらいの粘土をブレンドして瓦の土づくりをします。この配合率を編み出す過程で長年の経験と勘が問われます。とはいえ粘土は自然界のものなので、いまだに分からないことが多く、技術的にこれで良いということがないデリケートな世界です」と説明する。なお遠藤さんは、いい粘土がある場所は地形を見れば分かるそうだ。また先祖代々、どこにいい土があるか言い伝えられているとも。ただ無限にあると思う粘土だが、遠藤さんによれば「土は有限です」なのだそうだ。

この日、出来上がったばかりの安田瓦を愛おしそうに抱えて話す遠藤和人さん。
この瓦を叩くと楽器のような澄んだ音がした。

最北端の瓦産地

ところで安田が北限の産地になった背景を教えてください。

「現在、安田より北に瓦産地がありません。以前は全国的に産地が分布していましたが、東北地方は瓦に適した粘土がなく、凍害や塩害に耐えられる瓦を製造できなかった。また住宅様式の洋風化で需要と供給のバランスがとれず、産地として存続できなかったのです。その点、安田は粘土も技術もあり、いつしか国内で最北端になりました」。そして歴史のある産地ならではのことを教えてもらう。「現在の瓦は一定のスパンで、大きさや構造が変化し進化しています。でも百年以上も長持ちする瓦は修理をすることもあり、万が一の修理のために、時代物の瓦をほぼ備えています」。

そして伝統の瓦産業に関わっている思いについて「当社は瓦屋根の施工もやっていまして、雨漏りの修理を依頼されることがあります。修理対応に伺い雨漏りが止まると、『早く修理してくれて助かった』と喜ばれます。そんなお客様の姿に接すると、あたりまえの安心・安全を守っていることを実感し、この仕事をしてきたことに喜びと誇りを感じます」と結んだ。

なお『丸三』という社名は、瓦産業が家内工業的な生産体制から、近代的な工場生産に移行する昭和四十年代に親戚同士で共同経営を始めたことに因むという。

工場のなかへ

後日、工場内を見せてもらう。天井の高い工場の一画に、安田から採り戸外でひと冬寝かせた粘土が、うず高く積まれ、工場の生産規模の大きさを見せつけられる。その天然の粘土から小石や木の根を取り除き製錬された『土練』という工程を経た原料が、熟練工の目視や打音による厳密な品質管理のもと、ベルトコンベアーや空中レーンを移動しながら、成型・乾燥・釉薬がけ・焼成の工程を経て、七日間で鉄色に輝く安田瓦が誕生する。さまざまな機械が作動する音や、次から次に変貌していく生地の様子など、まるで空飛ぶ瓦の遊園地のようだった。そのコンピューターで生産制御する近代的な工場棟の向かいに、『役瓦』と呼ばれる、瓦葺きに欠かせない特殊な部材を作る工場棟がある。そこでは昭和期と同じ方法で、職人の手でひとつひとつの瓦が粛々と製造されていた。

その無駄のない身のこなし方や年季の入った道具は、代々この地で受け継がれてきた先人の知恵を明白に物語っていた。

語りはじめた安田瓦

伝える | 瓦屋の未来戦略

鬼師の表現力

安田瓦の生産は、天保十四年（一八四三）から本格的に始まったとされる。それから百八十一回目の春を迎えたある日、観光スポットとして注目されている『やすだ瓦ロード』を旅人気分で走ってみた。

そこは阿賀野市保田、通称『庵地（あんち）』と呼ばれる地区。瓦の窯元が小規模な家内工業だった時代、分業制で瓦の生産に従事した瓦屋・鬼屋・粘土屋が集積していた。昭和の最盛期で三十七軒の事業所がひしめき、五百人ほどの人が瓦の生産に従事していたという。そんな往時のざわめきの痕跡が見えるエリアの一画に、前述の丸三安田瓦工業株式会社と五十嵐瓦工業株式会社の近代的な工場が、やや離れてある。所々に鬼瓦や特注品の成型を専門とする鬼屋の長場鬼瓦工場と村秀鬼瓦工房があり、機能一点張りの周辺に柔らかい風情を灯している。その新旧の時代が混在し、モノづくりの産地が発する雑多なオーラが工場好きな取材者の好奇心を煽る。

車を進めると、思い思いに描かれた絵入り瓦が建物の側面を覆う、不思議な光景に出会う。さらに美しい土塀から飛びだす考える小鬼、道端で談笑する小さな妖怪たち、遠目でしか見ることのない鯱鉾（しゃちほこ）や鬼瓦が地上に設置されている様子など、ユニークな光景を発見するたびに停車し写真を撮る。そして圧巻は、『やきもの広場』で天を衝く、高さ三・五メートルの巨大な鬼瓦のモニュメントだ。多くの人が鬼瓦と聞いただけで瞬時に像が浮かぶ、古典的な造形を現代風にアレンジし、親しみさえ抱かせるデザイン力と、思い切りの良さに驚いた。まさに瓦産地でしか叶えられない荒技、伝統ある地場産業の匠たちが、技術の粋を集め現代の世に美意識を問うていた。製作を担った鬼師が完成に至るまで、どれほどの戸惑いと葛藤を繰り返したのだろう。それは長い間、地域経済を支えてきた瓦屋のプライドをかけた、日本独自の瓦文化の価値の再構築であり再発信でもあった。

目の前のバス停から

それにしてもユニークなやすだ瓦ロードの整備は、どのように始まったのか。組合理事長の遠藤和人さんに、もう一度聞いてみた。「市営バスがこのあたりを通るようになり、会社の前にバス停が置かれました。ある風の強い日、バス待ちしていた年配の方が強風で困っている様子を見て、気の毒に思い建物の全面を瓦で覆ったバスの待合所を作ったことが発端です」。その形が斬新で評判を呼び、産地の武器を駆使した活性化が始まる。十数年前のことだ。「整備のコンセプトは『賑わいのない所に商売の発展はない』です。様々な瓦の装飾品をストリートに設置し、多くの人に瓦ロードを散策してもらい、安田瓦の製品を知ってもらい、応援してもらえればと思い整備を進めてきました」。

確かに工場街は、どこに行っても瓦づくし。得意な瓦をふんだんに使い訪れる人を楽しませようとする工夫にあふれ、アミューズメントパークに迷い込んだようだった。

令和5年夏に竣工した安田瓦協同組合の事務所と体験交流施設を兼ねる、にいがた瓦館「かわらティエ」。

瓦ロードの中央部にある「やきもの広場」に立つ巨大なモニュメント。鬼瓦の顔は廃棄される瓦でできていて、後ろ頭に可愛いモチーフが埋め込まれている。

緩くカーブする道の所々で訪れる人を待つ瓦の装飾品の数々。鬼師の腕が冴えわたっていた。

手で味わう瓦粘土

瓦の製造工程を実感したくて、組合が運営する『かわらティエ』でミニ鬼瓦づくりに挑戦した。

小学校以来、触れたことがなかった粘土の塊を前に恐る恐る手をだす。それが瓦の原料そのものだと聴き、それだけでワクワクする。はじめに適量の粘土を型に入れ、隅々まで土を押し込む。隙間なく押し込むのがコツ。次に型からはみ出た土を、糸鋸で削ぐ。そして型の四隅を木槌でポンポン叩き、型をひっくり返すと、あら不思議！鬼瓦の形になった土が出てきた。その表面を水で磨き、より怖そうな表情にするために角や鼻などを伸ばしたり潰したりし、最後に竹串や爪楊枝で思い思いの文様を描き自分だけの鬼瓦の生地が完成した。それを乾燥し、業者の窯で焼いた完成品が、後日自宅に送られてくる仕組みだ。驚いたのは土のしっとりとした手触りと、思いの外、意図した造型が作り易いことだった。素手で掴む土は気持ちよく、手のひらから大地の温もりがひしひしと伝わってきた。そして瓦づくりの工程で、土づくりが如何に重要なのかも少し理解できた。

県内外のPRイベントに出向くことが多い組合の加茂豊和さんによると、ミニ鬼瓦づくりは首都圏のイベントで人気があり、なかでも仕事で忙しい女性が注目するそうだ。「こうした体験を通じ、安田瓦を身近に感じてもらえたら嬉しい」と加茂さんはいい、最後に「住宅の洋風化などで、伝統的な瓦の需要拡大への道筋が安穏としたものでないことは事実です。阪神・淡路大震災以降は、瓦に対する風当たりも強い。でも国で定めた耐震化を強めたガイドライン工法があるので、あまり心配しないで欲しい」と締める。

五頭の山塊をおく大地の土塊が、炎によって変容した安田瓦。市場占有率は小さくても国内四位のシェアを誇る。この瓦の名品が、誇らしげに魅力を語りだした今。伝統が未来と融合する眩しい瞬間を、みんなで産地まで見に行こう！

粘土の型どりから文様づけまで、ミニ鬼瓦づくりの一連の工程を再現してくれた安田瓦協同組合の加茂豊和さん。

瓦工場の一画にうずたかく積まれた天然の粘土。

倉庫の壁を覆うイラスト入り瓦。

４町村からなる阿賀野市の誕生記念に立てられた、前衛的な瓦のオブジェ。

インフォメーション

安田瓦協同組合

〒959-2221 新潟県阿賀野市保田7372
TEL 0250-68-2112

丸三安田瓦工業株式会社

〒959-2221 新潟県阿賀野市保田6130-1
TEL 0250-68-3802